様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３８１２８６

研究課題名（和文）日本語コーパスと内省に基づく論述文語彙指導のためのWeb教材開発とその評価

研究課題名（英文）Development of a web-based teaching material and its evaluation for teaching vocabulary appropriate for dissertations based on a corpus of Japanese language and self-reflection

研究代表者
井上　次夫（Inoue, Tsugio）

高知県立大学・文化学部・教授

研究者番号：３０３４２４６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本人学生、外国人留学生が論文・レポートにおいて話し言葉を始めとする論述文として不適切な語彙を使用している状況の改善を目的とするWeb教材を開発するための基礎となる単語、連語、慣用表現等の論述文語彙リストを作成し、それに基づく論述文語彙教材『論述文の基礎力アップ』とその解答集を作成した。また、問題作成ソフトウェアを用いて作成したWeb教材の一部を学内のムードルで試用し、学習者への本格的な活用に向けて基盤を築くことができた。

研究成果の概要（英文）： This study created a list of vocabulary appropriate for dissertations, consisting of words, collocations, idiomatic expressions, etc., which lays the foundation for the development of a web-based teaching material, with the aim of improving the current situation where both Japanese and international students are using vocabulary inappropriate for dissertations in their academic papers and reports, such as spoken language. Based on the list, a material for learning vocabulary appropriate for dissertations, improving the basic skills of dissertations: Knowledge and skills of language, was created along with a list of questions and answers.
A portion of the web-based teaching material created using question-creation software was tested on the on-campus learning management system called “Moodle” and evaluated, which contributed to laying a foundation for its full-scale utilization.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語コーパス　論述文語彙　Web教材　教材開発　様式的位相

１．研究開始当初の背景

国語学における話し言葉と書き言葉の位相研究は、菊沢季生（1993）『国語位相論』に始まる。そこでは話し言葉と書き言葉は位相的様式論として位置づけている。そして、中心的に扱っているのは、性別や世代の相違、社会的階層や職業の違い等であった。その後、大規模な記述的研究として国立国語研究所（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』が行われた。これによると、話し言葉と書き言葉の相違については、単語の文体という観点から捉えることができる。つまり、単語をその硬軟（あらたまり度）から「俗語」「くだけた日常語」「無色透明な日常語」「あらたまった日常語」「文章語」に５分類することができる。その結果、話し言葉はほぼ「俗語」「くだけた日常語」「無色透明な日常語」、書き言葉はほぼ「無色透明な日常語」「あらたまった日常語」「文章語」に相当する。

一方、多様な位相上の差異や対立を多面的に観察した田中章夫（1999）『日本語の位相・位相差』により単語の文体は俗語・日常語・文章語の３分類を基本軸に研究が進んできた。近年、電子コーパスを用いた日本語研究が盛んとなり、位相研究にも新風が吹き込んでいる。例えば、井上次夫（2009）「論説文における語の文体の適切性」（『日本語教育』141）では、日本人学生及び外国人留学生の論述文の執筆に際し、実用と教育の観点から、論述文における使用語の適否を判断することを目的に単語の２分類を提案した。そこでは分類基準に国立国語研究所による日本語大規模コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に出現する単語をデータとして単語文体の分類基準・方法を明示したうえで、全品詞にわたる具体例を示している。その後、「日本語作文作成支援システムなつめ」（2010）のような日本語の文章で単語がどのように使われているか、どの程度使われているかを検索できるシステムが公開されており、論述文語彙を確認する環境が整備されてきていた。しかし、それらは学習者が個人で学習するための支援ツールであり、語彙指導の観点に基づく教材については井上次夫（2010）「単語の文体」のような紙媒体による教材の段階であった。

２．研究の目的

本研究は、日本人学生、外国人留学生が論文・レポートで話し言葉など不適切な語彙を使用している状況を改善するためのWeb論述文語彙教材を開発し、その評価を行うものである。

本研究の具体的な目標は、国語教育と日本語教育の論述文指導に役立つ単語、連語、慣用表現等の論述文語彙リストを日本語コーパス調査と有識者の内省に基づき作成することである。そして、論述文語彙を効果的に習得できる論述文語彙教材（冊子）、その指導実践を生かしたWeb教材を開発することにある。そして、それらを用いて指導実践を行い、学習者からのフィードバックを得て、評価する。

さらに、以下の点について明らかにし、その指導法についても提案しようとする。

（1）論述文における不適切な語彙・表現の実態

高校生・高専生・大学生・留学生が書いた論述文を中心資料として、そこに出現する終助詞、縮約形、省略形、言いさし等の口語的表現、オノマトペ、感情表現、敬語、倒置法、体言止めその他の単語レベルを超えた不適切語彙・表現の使用実態を明らかにする。

（2）論述文語彙の明確化

論述文での不適切な語彙を適切な語彙へ書き換えて論述文語彙を具体化する。例えば、「いろんな」に対して「さまざまな・多様な・多岐にわたる」等を示す。また、論述文調査、日本語コーパス調査、有識者の内省に基づき、

論述文語彙とはどのようなものかを明確化する。

（3）語彙文体の表示法

語彙の文体を（話し言葉）←卑俗体・口頭体・汎用体・書記体・文章体→（書き言葉）のように分類する一方、単語の文体の数値化を（0≦単語≦∞無限大）の範囲で試みている。しかし、学習者にとっての実用的で有益な表示法は確定していないため、その表示法を確定させる。

（4）Web 教材の在り方と評価

論述文語彙の Web 教材はどのようにあるべきか、冊子教材と比較しながらその在り方を明らかにする。また、どのように指導・活用するか、指導法及び活用法の在り方も明らかにする。そして、その在り方から作成した Web 教材を評価し、それに基づく改訂版を示す。

３．研究の方法

（1）学生の論述文を収集して不適切語彙・表現の実態を解明し、白書・論文等のコーパス調査を行い、有識者の内省判定を加えて論述文語彙を選定する。

（2）単語教材に関する之までの研究を発展させて論述文語彙教材を作成する

（3）教材コンテンツを開発・作成し HP 上で運用し、教材使用者等からフィードバックを得て評価・改訂を行う。

最初に、教材の核となる論述文語彙の選定とリスト作成を行う。本研究は学生の論述文での使用語彙の実態を踏まえ、適切な論述文語彙をコーパス調査によって明らかにし、有識者の内省判定を加味した論述文語彙の選定が出発点となるため「論述文語彙リスト」作成を次のように行う。

（1） 論述文の収集

研究の基礎資料となる高校生・高専生・大学生・留学生が書いた論述文を収集する。既に申請者のこれまでの収集分に加え、研究協力が得られる高校，高専、大学、留学生センター等を入手先とし、各校で既に書かれた論述文を複写する。また、各校に直接出向き新たに題名・内容指定の論述文（600 字～1200 字）の執筆を依頼し収集する。

（2） 不適切語彙の調査

上記（1）の論述文を読み込み、不適切語彙を逐次、拾い出す。なお、論述文語彙と対極にある話し言葉は既に扱っているが、拾い出した語彙は話し言葉コーパス、Yahoo!知恵袋での出現率調査を行う。

（3） 不適切語彙の書き換え

上記（2）の不適切語彙を適切な語彙に書き換える。日本語教育ではやさしい日本語への書き換え研究が始まっているが、検定試験出題範囲内の単語による書き換えのため困難が伴う。これに対し、本研究では書き換え候補が複数存在する困難があるが（例：このごろ→近頃、最近、近年）、各語は文体値による位置づけが可能であり、学習者にとってはむしろ使用語彙の使い分けの判断基準が得られ、実用的であると考えられる。

（4） 論述文語彙候補のリストアップ

上記（3）で扱った語彙のほか、論述文語彙としてどのようなものがあるかを網羅的にリストアップする。入手先としては、先行文献（国語辞典、類義語辞典、和英辞典、国語関係書籍、日本語教育用教科書・指導書・問題集、関係論文、国立国語研究所『分類語彙表 増補改訂版』）、論文データベース（『国語学』『言語研究』『日本語学論説資料』他）、各種基本語彙表等である。採録の判断基準は、当該の語・表現と意味・用法が近似するものの存否、使用頻度等を重視する。また、論述文での通常の使用語彙・表現とし、今回、学術用語（専門用語）は対象外とする。

（5） 論述文語彙リストの作成

論述文語彙リストを作成する。表示法は、単語の場合、既に提案したことがあるが、さらに検討を進める。また、各語に付す文体名称、文体値（大きいほど書き言葉らしい）は

コーパス調査結果を基本としながら有識者の内省判定を加味して決定する。

【第１段階】

(1)　冊子「論述文語彙教材」の作成

これまでに作成した 3 冊の開発教材（「単語の文体」「アカデミック・ワード演習」「アカデミック・ジャパニーズ表現の演習」）のノウハウを生かし、新たな論述文語彙教材（以下、冊子教材）を作成する。

冊子教材は、横書き、A4 版 50 ページ程度、約 300 冊を発行する。特色は、演習問題が多種（例①話し言葉と書き言葉の相互書き換え、②複数語を書き言葉らしさにより並べ換え、③地の文や会話文の空所に入る適語の選択、④論述文等における不適切語・表現の訂正：(ｱ) 下線部の語の適否判断を求める、(ｲ)下線部の不適切語彙を訂正する、(ｳ)文中より自力で不適切語彙を指摘・訂正する、⑤課題論述文の使用語彙の相互評価等)、問題数 300 問以上、巻末に解答例を付すことである。

その他、仮名遣い、送り仮名、常用漢字等の表記法のきまり、論述文語彙リストを付録に収録する。このように、本教材は論述文に関する語彙使用の知識・技能が身に付けられ、論述文執筆で迷った際には本教材に立ち戻り解決が図られる拠り所となるべく編集する。

(2)　冊子教材の評価・改訂

作成した冊子教材は高専で使用するほか、高校、大学、留学生センター等で論述文を作成する学生に使用を依頼し、フィードバックを得て評価・改訂する。

【第２段階】

これまでの冊子教材の開発と評価を生かし、Web 教材を制作する。それを高専生対象に e ラーニングとして指導実践する一方、申請者の HP（英訳付）上に公開し学習者・閲覧者等から広くフィードバックを得て評価を行い、開発教材の改訂を行う。

(3)　Web「論述文語彙教材」の制作

作成した冊子教材を生かし新たに Web 論述文語彙教材を開発し、申請者の HP 上に公開する。e ラーニングは、導入が目的の時代から学習者支援・効果提示の時代を迎えている。そこで、本研究では〈遊び〉〈実用性〉〈効果〉をキー・ワードに魅力的なコンテンツ（例：講師動画、Flash アニメ解説、選択・記述問題）を開発する。なお、Web 化の技術・作業の実務は専攻科生、専門業者に委託する。

(4)　Web「論述文語彙教材」の評価・改訂

公開した Web 教材を研究発表等で広報し、フィードバックを広く得て評価・改訂する。

評価は、①高専生、論述文の収集で協力を得られた学生、②申請者が依頼する研究者・教員、③HP 訪問者を対象に、4 段階評価と感想・意見の記述内容から得る。

４．研究成果

まず、論述文における不適切な語彙・表現の実態、論述文語彙の明確化、語彙文体の表示法等については、論述文語彙教材「単語の文体」「アカデミック・ワード演習」「アカデミック・ジャパニーズ表現の演習」を検討するとともに、新たな資料を加えそれらをいっそう具体的に明らかにし、研究論文として公表することができた。

次に、Web 教材化とその評価については、論述文語彙能力を高めるために、教材ソフトウェア THiNQ Maker（ロゴスウェア社）及び学内の Moodle を用いて具体的なサンプル問題を作成し、試用した。この結果、Web 教材化、公開運用への道筋を付けることができた。一方で、作問・出題においては選択肢問題を中心とする教材ソフトウェアに登載された問題形式パターンに制約を受けるという課題が認識された。このため、問題形式パターンの制約中での良問作成の創意工夫が求められること、別途、紙媒体の教材が必要であること、また、そこでは論述文語彙に特化す

るのではなく、それに加えて日本語に関する知識・技能に関する能力の定着を図ることが基盤にあるべきこと等の知見が得られた。そこで、論述文語彙を主体にしながらその基礎知識・技能を養成することを目的とする紙媒体による教材「論述文の基礎力アップ－言葉の知識・技能編」（B5 版 64 頁）及び「論述文の基礎力アップ－解答編」（B5 版 34 頁）を別冊形式で制作し、運用体制を整えることができた。

最後に、研究成果としての Web 教材の完成及びホームページ上におけるその公表に向けての基盤を研究分担者からの助言を得て整備することができた。

５．主な発表論文等

（雑誌論文）（計 4 件）

・井上次夫、論述文の語彙指導に役立つ冊子教材の開発、高専教育 37、161－166
・井上次夫、日本語教育に有用な単語文体の分類について、サンクトペテルブルク国際会議日本語論集２、73-82
・井上次夫、傾向を表す接尾辞の分析―ガチとギミ（再考）、高知県立大学文化論叢４、21-40
・井上次夫、語彙の多様性と難易度から見た意見文の分析―中国・韓国の日本語学習者と日本人大学生を例に、高知県立大学紀要文化学部編６７、29-42

（学会発表）（計 6 件）

・井上次夫、e ラーニングを用いた「プレゼンテーション」の学習、全国高専教育フォーラム、豊橋技術科学大学
・井上次夫、単語の文体判断について（３）―話し言葉と書き言葉、全国大学国語教育学会、広島大学
・井上次夫、接尾辞「がち」と「ぎみ」について－日本語コーパスによる検討―、日本語教育学会東北地区研究集会、東北大学
・井上次夫、様式的位相の統一的表記について、第８回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ8）、国立国語研究所
・井上次夫、語彙の多様性と難易度から見た意見文の成否、第 17 回専門日本語教育学会、武蔵野大学
・井上次夫、留学生の「送り仮名の付け方」の特徴－送り仮名調査の誤答分析から、第 6 回日本語教育研究集会、高知大学

（図書）（計　　件）

（産業財産権）

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

（その他）
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
井上次夫（INOUE,Tsugio）
高知県立大学・文化学部・教授
研究者番号：30342463

(2)研究分担者
中村篤人（NAKAMURA,Shigeto）
奈良工業高等専門学校・電子制御工学科・講師
研究者番号：80619867

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）